

日本の図書館における子どもコーナーの機能配置の変遷

準会員 ○末田 光*
正会員 岡松 道雄^{※2}
宋 俊煥^{※3}

児童閲覧室 児童サービス 子どもコーナー
読み聞かせ 「市民の図書館」 機能配置

1.はじめに

現在、公共図書館には情報資料の収集や保管、利用者への提供にとどまらず、学校やサービスの窓口、ワークスペースや観光名所に近い機能を持つなど、その可能性は膨らんでいる¹⁾。1950年の図書館法の発布から現在まで、図書館の数は増加し続ける一方²⁾、2021年における子どもの数は40年連続の減少を記録している³⁾。図書館が子どもに対してどのようにその姿を変化させたのかを把握することは、今後図書館がどのようなサービス・役割を背負うべきかを考える上で重要である。

本論文では、時代や社会背景によって変化する図書館の中の子ども向けコーナーの変遷を機能配置の観点から整理する。時代ごとの図書館計画の考え方やその流れを書籍やヒアリングにて調査しまとめる。読書空間を通して子どもへの認識の変遷を整理することが目的である。

2. 図書館の子どもコーナーのソフト面の変遷

2-1. 子どもへの認識・図書館利用

表1で示すように、1900年代に山口県から有識者がスタートさせた児童閲覧室⁴⁾は、着々と全国に波紋を広げる。戦後1950年代の公共図書館は特に館内閲覧主義を掲げ、学生の勉強部屋としての使い方をされており、利用者の図書館滞在時間はかなり長かった⁵⁾。この時代は図書館の児童サービスは増加したものの、十分ではなかった。

1970年代は、当時の様々な図書館の基本計画に児童サービスを重要視することが謳われており、児童室の在り方が明確化された。1971年の町田市の基本計画書など、成人や児童、レファレンスをワンルームとして固定間仕切りをなくした形態も幾つか見られる⁶⁾。また、1970年・1976年に出版され当時の図書館計画のバイブルとされた書籍の「市民の図書館」⁷⁾では、児童室を必ず設け、それが独立しなくてもよいとの記述がある。

1980年代には児童が図書館において最も大切な利用者とも言われた⁸⁾。開架貸出室は動的であり必ずしも静かではなくてもよいとされ、母子での利用も意識されている。また、児童司書を必ず置くことも推奨される⁹⁾。

1990年代前半に居心地の良い図書空間が求められたことから、再び滞在型になった。子どものためのスペースも他の人にとっては騒がしく感じてしまう可能性があるため、上下に階を分けたり、子どものために単体の図書館を別に設けたりする動きがみられた。

2000年代、児童室は親しみやすく楽しく過ごせる雰囲気

気を目指す。子どものための館内閲覧スペースが地域図書館に設置⁹⁾され、室内での過ごし方が重視される。

2-2. 利用者・対象年齢

公共図書館は初めから子どものためのスペースを設けていたわけではなく、1903年の児童サービス開始前に幼児に対して入館を許可した図書館はほぼ存在しなかった。1960年代頃に勉強目的ではなく図書閲覧のため滞在する利用者に焦点が当たり始め、それを契機に子どもたちのための空間が大きく発展する⁵⁾。1970年代には児童の図書館計画は他の部分と区別し、また独立した児童図書館では低学年、高学年および中学生といったような年代ごとの区分に従ってゾーンを分けることを推奨している⁶⁾。1980年代には児童閲覧室の対象が幼児から中学生とされ、さらに1990年代にヤングアダルトサービスを児童サービスと分けるという概念も広まってからは子どもコーナーの対象が0歳児から小学校高学年生までとされた¹⁰⁾。

3. 図書館の子どもコーナーのハード面の変遷

3-1. 児童閲覧室の始まり(1903年～)

1920年代後半から長方形の部屋が多かった児童閲覧室だが、1960年後半からワンルームの形態がみられる。1970年代以降は壁を持たず柱と書架で区切られた児童の空間が成人の閲覧室と一体化したワンルームが多い。この頃には子ども用の手洗いの付設が望ましいとされた⁷⁾。1980年代には部屋として区切られた児童室も再び増え始め、また「朗読」や「読書会」、「あそび」、「紙芝居」など個性的なコーナーが各地の図書館に現れた。2000年代には、幼児が対象のトイレや、授乳やおむつ交換ができる部屋の付設が推奨¹¹⁾され、保護者の存在が意識された。

3-2. 児童部分と成人部分の区別の変遷

児童部分と成人部分とは1900年代から入口も分けられていたが、1970年代のフレキシビリティの要請によりその区別がなくなった。1980年代になると成人と子どもが同じ入り口となる。最近は様々なタイプがあるが、両者の快適性を考慮してそれぞれを上下階に分割したり、子ども図書館単体で建設したりすることが流行している。

3-3. 書架や机、椅子などの設備

初期の児童閲覧室は部屋の中心に椅子と机、壁側に本棚が配置されることが多かったが、1976年の「市民の図書館」では、机や椅子、書架などは少なくとも2種類以上の寸法の備品を用意することを推奨している。それまでは閲覧席と貸出デスクでいっぱいだった室内に作業スベ

表1 図書館の子どもコーナーの機能配置の変遷

	ソフト面		ハード面			
	子どもへの認識・図書館利用	利用者・対象年齢	児童閲覧室	他の部屋との区別	書架や椅子など	お話コーナー
1899 図書館令 1900年代	欧米から学んだ有識者により児童サービスが検討される。	図書館利用者は主に小学生以上、幼児は入館禁止が多い。			公共図書館ではほとんど多くの資料が閉架	
	日本に児童閲覧室・児童サービスが導入(1903年 山口県立山口図書館開館以降)					
	戦時中に児童サービスが衰退		長方形の部屋が主流	成人部分は出入口から別にするのが一般的	机や椅子が児童閲覧室の主な面積を取る。	
1950 図書館法 1950年代	独立児童図書館が導入(1949年 広島市児童図書館)	図書館は学生の勉強部屋であるという認識、滞在時間が長い。		・児童は騒音源であり成人の邪魔になる ・児童室は子供らしい雰囲気を保ちたい ・図書扱いの心配	開架式への移行を目指す。	
	児童も一度に2時間以上利用 都道府県立図書館 児童サービス不要論		図書館戦略目標 ・児童室を必ず設ける ・児童司書を置く ・児童室にふさわしい作り	隣室との境界は防音壁とするのがよい。 入口は専用のものを設け、他の部分の階音にならないようにする。		絵本出版文化の発達
1960年代 中小レポート	児童サービスをしていない公共図書館が多い現実にその重要性を訴える。		完全開架を強調 貸出しの簡素化	フレキシビリティの要請 児童室は別室でなくてもよい	開架式が主流	児童室にお話コーナーが導入(1967年 府中市立図書館) 当時は使われず
1970年代	児童の利用は一度に20分程度	独立した児童図書館では低学年、高学年および中学生にわける。			みな自由採架式	
1976年 「市民の図書館」	図書館にはかならず児童室を設ける。これは独立した部屋でなくともよい。 サービスの中心は貸出し。	学校の先生や、お母さん、それらの人と児童図書館員の交わりもたいせつ	十分な広さと、たくさんの本、親しみやすい読書席を用意。 子ども用の手洗いは、児童図書館員の目とく位置に。	児童室も、図書館のなかでもっとも入りやすい位置になければならぬ。 児童室の入口を一般と別にすべきだという説にこだわる必要はない。	机、椅子、書架などの備品は少なくとも2種類以上の寸法。 貸出デスクのそばには、作業スペースも十分にとる。	お話のためのコーナーを必ず付けたい。ふだんは読書についてお話し会のとき仕切るか、ちがった雰囲気の一部屋、じゅうたんを敷くなど。
1980年代 バブル期の建設、建て替え	児童は活発に図書館を利用 図書館の最も大切な利用者	対象は3歳児程度から中学生前半まで。 幼児と小・中学生の部分とは異なる扱いをする。	ワンルーム形式が多い 児童司書のデスクを設ける必要がある。	開架貸出室は動的な場所でも必ずしも静かでないもよい。 母子連れには児童室は別室でない方がよい。	その体位差に合わせて、数種類の寸法のものを用意。 マット状の台が最近増加傾向	小学生低学年以下の30人前後が入れる、30㎡程度の規模のスペース。円形などの注意が語り手に集中できるような空間構成。
1990年代	子どもコーナーを騒がしく感じる人も多い。 図書館活動を通じて児童に公共の意味を教えることは、児童がおそらく意識して初めて接する公共施設である図書館の役目である。	家具及び書架などの配置により幼児と小・中学生の利用部分を区別する。 成長段階に見合った対応	様々なタイプが出現	成人と児童の出入口は一緒 階を上下に分けたり、子ども図書館を作る動きも。	児童室らしくかわいらしい非日常空間づくりを目指す。 批判	児童用スペースの一部にとる個室にする。床はカーペット敷にすることが多い。
2000 子ども読書年		ヤングアダルトや乳幼児へのサービス 対象は0歳児から小学校高学年まで。	子どもたちに親しみやすく、楽しく過ごせる雰囲気。	館員がつねに子供の行動を掌握でき、かつ一般の利用者の迷惑にならないよう、他の部門から離れた位置に。	書架や机、椅子などの寸法は対象とする児童に適したものとし、デザインや形の変わったものを適宜用いるのもよい。 画一的な家具配置とせず家具の形状に変化を持たせたり、並べ替えの自在なものとする。	部屋とはせず家具やカーテンなどで仕切る方法をとればスペースの融通性が高くなる。 幼児を対象としたトイレを近傍に設ける。また、授乳やおむつ交換のできる部屋を付設させる。
2000年代						

ースも十分にとるように説かれた。1980年代には子どもの体位差に合わせて数種類の寸法の家具を用意するよう推奨される⁸⁾。しかし当時、マット状の台の設置が流行したが、図書館活動を通じて児童に公共の意味を教えることも図書館の役目だとして批判があった。2000年代に入ると閲覧室内は画一的な家具配置とせずその形状や並べ替えなども工夫を凝らすよう勧められる。

3-4. 図書館のお話コーナーの始まり (1967年～)

お話コーナーの設置は1967年の府中市立図書館が最初だったが、当時は十分に利用されなかった⁵⁾。1970年代には福音館書店らの力により良い絵本が世間に広まり、それ以降お話会コーナー設置が盛んとなった。1980年代のお話会コーナーは、児童部分の一角をお話会開催時にオーディオンドアなどで仕切るものと、遮音構造の室を設けるものの2パターンが主である。2000年に子ども読書年が公布され、お話会サービスも一層充実してきた。児童閲覧室とお話コーナーとの関係性も徐々に工夫が凝らされ、児童室とお話の部屋の階が違う例^(注1)や、外側にテラスを設けた例^(注2)も見られる⁵⁾。

4. 結論

勉強に利用されるため長時間滞在型であった図書館は1960～1970年代から現在までの間に子どもが過ごしやすい環境に近づいた。従来、子どもは成人の閲覧の邪魔だと考えられていたが、日本の図書館がフレキシビリティの要請により「〇〇室」から「〇〇コーナー」へ移行したことも、児童のための図書空間の拡大や一般の空間と融合や、またそれに対する成人利用者の理解のきっかけになったと推測できる。近年では、カフェや会議室と図書館の複合化^(注3)や、館員が本を屋外に持ち出して読み聞かせるイベント^(注4)などがあり、子どもの図書閲覧場所に制限のない自由な雰囲気が好まれている。

【脚注】

- (注1) 日野市立高橋図書館の例。
 - (注2) 鶴ヶ浦町立図書館の例。
 - (注3) CCCが指定管理者となった武雄市図書館などの例。
 - (注4) 福山市立中央図書館のイベント「NIWASAKI」。
- 【参考文献】
- 1) 空気調和・衛生工学会, 「建築設備集成 学校・図書館」, オーム社, (2011), pp25-pp28
 - 2) 社会教育調査 平成27年度 統計表 図書館調査 | データベース | 統計データを探索 | 政府統計の総合窓口 (e-stat.go.jp), 最終閲覧 2021.11.20
 - 3) 厚生労働省政策統括官付参事官付人口動態・保健社会統計室「人口動態統計」, 最終閲覧 2021.11.20
 - 4) 山口県立山口図書館, 「山口県立山口図書館 100年のあゆみ」, 株式会社マルニ, (2004), pp8
 - 5) 西川馨, 「図書館建築発展史」, 丸善ブックス株式会社, (2010)
 - 6) 三浦道雄, 「図書館施設と設備」, コロナ社, (1975), pp79-80
 - 7) 日本図書館協会, 「市民の図書館」, 増補版, 日本図書館研究会(2010), pp84-pp93
 - 8) 津端宏・山本直人, 「建築設計資料 第7号」, 株式会社建築資料出版社, (2001)
 - 9) 日本建築学会, 「建築設計資料集成—教育・図書」, 丸善株式会社, (2003), pp176
 - 10) 児童図書館研究会「児童図書館のあゆみ 児童図書館研究会 50年史」, 教育史料出版会 (2004) pp15
 - 11) 岡田光正, 「現代建築学 [新訂] 建築計画2」, 鹿島出版会, (2003), pp103

*1 山口大学大学院創成科学研究科
*2 山口大学大学院創成科学研究科 教授・博士(工学)
*3 山口大学大学院創成科学研究科 准教授 博士(環境学)

*1 *Graduate Student, Department of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ.
*2 Prof. Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D.
*3 Associate Prof. Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D.